



文献紹介

Friedman, 'Autonomy, Social Disruption, and Women'

概要

私たちは常に何かを選び続けながら生きています。人が何かを選び、決定する際に重要になるのが、自律という概念です。他の誰かや集団、社会から強制されることなく、自分自身の基準や価値観によってものごとを決める自律的なあり方は、私たちが自分らしく生きていくために確かに重要なことです。本論文は、自律の概念についてフェミニズムの観点から検討しています。個人を独立した原子として捉える伝統的な自律の解釈が抱える問題を指摘し、社会的関係に注目した関係的な自律の理解を提案しています。その上で、関係的な自律と関係の断絶について考察しています。

プロジェクトとの関係

人生の身じまいに関わる意思決定においても、その人らしい「しまい方」を選択する自律のあり方は重要です。しかし、もし「自律」が社会的なつながりを断ち、誰にも頼らず自分で決めることを求めるとすれば、高齢者には自律的な選択は難しいということになってしまうかもしれません。自律や自己決定がどのようなあり方を意味するのかを再考するにあたって、本論文で提案される関係的な自律の理解は重要な示唆を与えています。

キーワード：自律、ジェンダー、フェミニズム、社会的関係、社会的断絶

Marilyn Friedman, 'Autonomy, Social Disruption, and Women', in Catriona Mackenzie and Natalie Stoljar eds., *Relational Autonomy: Feminist Essays on Autonomy, Agency, and the Social Self* (Oxford: Oxford University Press, 2002), 35–51.

1 従来の自律の概念： ジェンダーの観点から

「自律」とは、通常、その人自身の基準や価値によって選択し生きることを指しますが、ここで言われる「その人自身」という考えには少なくとも二つの側面があります。それは、①自分の特定の選択とその選択の基準や価値を熟考すること、②その熟考が自律を妨げる干渉(他者による強制など)を受けていないことです。

「自分自身で決める」という自律の概念は、著者によると、典型的な男性的特徴を持っています。例えば、著名な画家であるゴーギャンは、妻と5人の子どもを捨てて、自身の美的探究のためにタヒチやマルティニーク島を訪れます。ゴーギャンの伝記には、家族を残して去ったことに対する彼の自己反省的な苦しみが続られていますが、ゴーギャンの語りは、伝統的な意味での自律的生き方が女性的関心とは正反対のもの

であることを示しています。なぜなら、自律は男性に社会的関係を断つよう駆り立てますが、女性にとっては、自分と子どもたちの生き残りとうェルビーイングは社会的関係にかかっているからです。今日でも、一般的に言って、女性は男性に比べると個人的なつながりの観点から自分自身を位置付ける傾向にあり、また女性の道徳的配慮は個人的つながりを維持・強化することが中心になるといいます。このように、著者によれば、従来の自律概念は男性的な理想に基づいており、女性的な生き方や関心とは相容れないものとみなされてきました。

2 自律の関係的特徴

しかし、自律と男性の間に歴史的に見出されてきたつながりは決して絶対的なものではなく、自律のジェンダーにおけるパラダイムは変化しています。まず、男性の間でも、自律は常に価値づけられてきたわけではありません。マイノリティの男性や、伝統的な家父長制的ヒエラルキー(軍隊や会社構造)の中にいる男性は、自律の能力を奪われてきました。さらに、女性の自律的な努力を示す多様な語りがすでに存在しています。その中には、家父長制的な制約に逆らって戦う女性のフェミニスト的な語りもあれば、伝統的な女性の役割である子育てに関して深く考察した非フェミニスト的な語りもあります。つまり、今や自律は、常に男性と関連づけられるとは限らず、また女性の生き方と相容れないものでもないのです。

そこで筆者は、伝統的な男性的特徴から解放された、新たな自律の定義を模索すべきだと主張します。自律を再定義する際に重要なのは、自律的なあり方にとって社会的関係が不可欠だという関係論的な洞察です。従来の自律の概念は「独立性」や「自己完結性」といった個人的・原子論的な特徴を理想としており、このために、自律の名のもとに他者との親密な関係か

ら離れることが正当化されてきました。しかし実際には、自律は本質的に社会的なものです。私たちは皆社会的な文脈の中で生きており、人間は結局のところ本質的に他者に依存しています。私たちが持つ熟考する能力やアイデンティティは、家族や地域社会、国家といった社会ネットワークに関わる事柄によって部分的に規定されています。自律的であることは、必ずしも他者や社会との関係を断ち切ることを伴うわけではなく、むしろ、自律は社会的関係を前提としているのです。

3 自律と社会的断絶

このように、自律は本質的には社会的関係と相対するものではないのにも関わらず、現実には自律的なあり方が社会的つながりを妨げる場合があります。ときどき、人は自分の周囲の人間関係やその根本にある価値観にひどく失望して、耐えがたいと思うことがあります。そうした強い不満があって、しかも他に選べる道があるとき、その人はその関係から少しずつ離れはじめるかもしれません。なぜこのような事態が起こるのでしょうか。

それは、自律は必ずしも社会的関係の断絶をもたらすわけではないものの、実際に自律的な生き方を選択することによって、社会的つながりが壊れる可能性は高まるからです。人間関係やコミュニティは、言語、習慣、伝統、歴史、目的、価値観など、さまざまな共有されたつながりに支えられています。こうしたつながりはいづれも、自律的な熟考によって批判的に見直される可能性があります。自分と他者を取り結ぶ関係に疑問を持ち、それを見直した結果、納得できないと感ずることがあるかもしれません。その場合、そのつながりを拒否し、関係していた人々と距離を置くことになることもあるでしょう。つまり、自律はそれ自体で関係を妨げるものではありませんが、その能力の実際の行使

が偶発的に社会関係を破壊することがあります。もっと厳密に言えば、自律的な熟考にもとづいて、特定の相手や集団の価値観を拒絶することが、それらから距離を取る原因となるのです。

ただし、忘れてはいけないのは、自律はあくまで「自らを省みて熟考する」という手続き的な概念であって、何か具体的な行為の指針をそれ自体に含むものではないということです。反省と熟考の過程で特定の関係から離れることはあるかもしれませんが、自律そのものが「関係を断つ」といった実質的な行為の内容や生き方を求めるわけではありません。

まとめ

自律的な決定と聞くと、周りに一切影響されず自分だけで決めることを連想するかもしれませんが。これまで、自律に関しては「他人に頼らず独立すること」という性質が強調される傾向がありました。しかし実際には、自律は他者との関係を断つことではなく、人とのつながりの中で

育まれるものです。ときに熟考の結果、関係や価値観に疑問をもち、特定の関係から離れることがあるかもしれませんが、それはあくまで自律の一部の現れにすぎません。自律とは、自分を見つめて深く考えるプロセスであって、「関係を断つこと」そのものを意味するわけではないのです。

重要な意思決定においても、周囲とのつながりを断ち切り、個としての自分だけで誰にも頼らず選択しようとする必要はありません。さまざまな人やコミュニティと関わることで、自律の能力を高め、社会的関係を内包する関係的な個人としてよりよい決定を下せるようになるかもしれません。むしろ、自分の考えを深めたり視野を広げたりするうえで、他者との対話やつながりは欠かせないものです。本論文に従えば、自律は単に「一人で決めること」ではなく、「他者との関係に基づいて自分でよく考えること」と言えるでしょう。

松岡明香里
京都大学大学院文学研究科・修士課程

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。
ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。